

令和4年度 学生による地域フィールドワーク研究助成事業
研 究 成 果 報 告 書

- ・機関及び学部、学科等名 富山国際大学子ども育成学部子ども育成学科
- ・所属ゼミ 富山国際大学イタイイタイ病研究会
- ・指導教員 松山 友之
- ・代表学生 飯澤 孔成
- ・参加学生 五十嵐早紀 石坂 亜蓮 尾島 那希 河井 亜虹 黒田 紗彩
 笹川 柊亮 竹内 あかり 竹山 前 平内 要 増山 咲良
 宮崎 大誠 毛利 廉 米倉 健之 渡邊 宗一郎

【研究題目】 イタイイタイ病の次世代への伝承について

1. 課題解決策の要約

四大公害病の一つであるイタイイタイ病は神通川流域で発生し、患者やその家族、地元住民等に深刻な影響を及ぼした。関係者のたゆまぬ努力で、今日まで多くの困難を克服してきた歴史をもっている。

一方で、発生から長い年月が経過し、富山県に生まれた私たちがさえ詳しく知らない。この歴史を風化させないために現地調査や高齢化する被害者の方から聞き取り、何が起こったかを学び、小中学生にどのように伝承していけばよいかを明らかにする。

2. 調査研究の目的

イタイイタイ病資料館を訪れる小・中学生にその恐ろしさや克服の歴史、関係者の思いや願いをどのように伝えるか、私たちの感性や発想を生かした伝承方法を研究する。さらに広報活動を実際に行い、開館10周年を迎えるイタイイタイ病資料館（H24.4.29開館）のこれからについても提案する。

3. 調査研究の内容

①イタイイタイ病に関する調査・研究及び被害者団体への提案

資料研究、イタイイタイ病資料館発行の小学生向けパンフレット、及び中学生向けパンフレットの読み込みと発生する疑問等に関する文献調査を行い、提案について案をまとめ関係者に説明を行った。

②語り部さんの調査

学校の訪問に合わせ語り部さんの講演に参加して、語り部さんを通して、当時の大変な状況を理解するとともに語り継ぐべきことをまとめた。

③視点の整理と資料館の紹介を小中学生へ伝える方法の検討

語り部さんの伝えたいことは何かをさらに深く考え、視点の整理を行い、どのように伝えることが効果的か議論した。一つの方法として、GIGAスクール構想に対応したタブレットの活用を検討することになり、AR（拡張現実）の活用を調査検討することになった。

④AR（拡張現実）に関する調査

富山大学教職大学院の協力を得て、VRやARについて、その活用法や実際の映像コンテンツを見てその利用について研究を行った。

⑤具体的な制作とその検討

学生のまとめたものに関してAR制作を委託し、モデルプランを制作した。

4. 調査研究の成果

①イタイイタイ病に関する調査研究から見てきたもの

関係者への活動の提案や調査を進めるにしたがって、イタイイタイ病の闘いの歴史は簡単に扱えるものではないことがよく分かってきた。長い歴史の中には数多くの困難があり、短期間にその苦しみを理解することは不可能に近い。その中で、伝承という一点に関しては、語り部さんを始め多くの関係する方々には危機感があることが分かった。「小中学生にどのように伝えるか。」は非常に大きな問題であり、そこに子どもを理解し、将来教員として子どもと関わりたいと考える学生の感性は無くてはならないものであることも見えてきた。当初計画していた活動を実施することはできなかったが、繰り返し調査研究を進める中で、小中学生に伝えることに関して学生の感性が必要であることが明らかになった。

②ARを用いた次世代への伝承

現在、県内の小中学校では、GIGAスクール構想により一人一台タブレットを持っている。このICT環境を活用してARを使った次世代への伝承について提案を検討した。内容としては、事前学習や事後学習の際に、小中学生が持つタブレットでQRコードを読み取ることで、学生がフィールドワークで集めてまとめた情報を読み込み、活用するというものである。モデルプランを作成したが、今後、継続的に研究を進め、モデルプランに修正と追加を行うことで内容の充実を図ることをイタイイタイ病資料館とも協議している。また、実際の小中学生から活用に関してアンケートを取り、見直しを進め、効果を検証しながら次世代への伝承の価値を高めていきたい。

<モデルプラン イタイイタイ病資料館ARのイメージ>



5. 調査研究に基づく提言

○学生自身の言葉や『感性』で伝えること

語り部として活動されている被害者団体の代表の方からも、小学生に「勝訴」ということを伝えても簡単に理解してもらえないという言葉があった。社会経験の少ない小中学生にとってこの言葉の意味を、本当の意味で分かりやすく伝えることが求められる。そこには学生の持つ『感性』が重要である。年齢も近く、今から社会での経験を積む必要のある学生こそ子どもに近い感性を持っている。この感性を生かしたい。この現状を踏まえ、高齢化する語り部のみなさんと初めてイタイイタイ病について学ぶ小中学生をつなぐ役割が必要であることを提案していきたい。

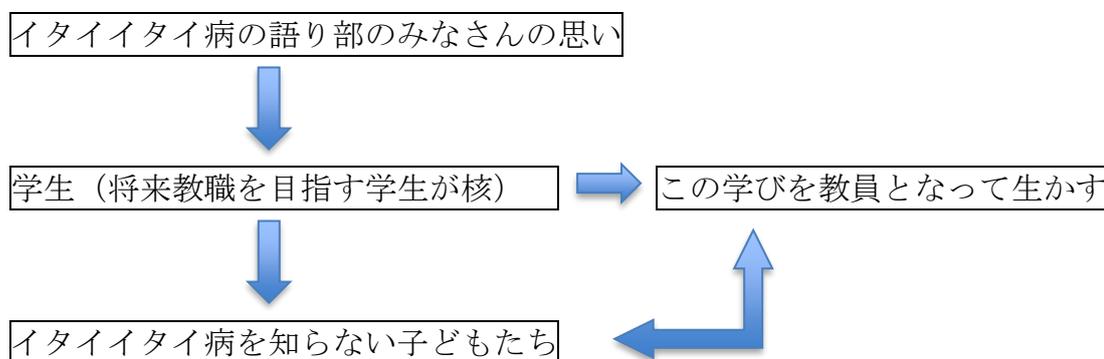
○ARなどの最新の『ICTの活用』を進め発展させること

今までのイタイイタイ病資料館や語り部さんの講話は、あくまで学校教育の一環として行われる校外学習等で訪問してはじめて成立するものである。語り部のみなさんの高齢化という問題に対して、映像コンテンツとして残すことも今後考えられると思う。すでにビデオ教材として制作されたDVDもある。しかし、それらは学習としては一方通行のものであり、与えられる映像情報を受け取る学びが中心になる。

今回制作したARはその意味で、一人一台タブレットを活用して、学校でも家庭でもどこでも学習者である子どもが主体的にアクセスできることに利点がある。ARで体験できるコンテンツの内容はそれほど深くなくても何度もアクセスし、小中学生が発想を深め、さらに何度も深く調べるきっかけともなる。このように今まで校外学習で訪問するイタイイタイ病資料館の展示やその映像コンテンツのように子どもから大人までを対象とした質の高いものでなくても、子どもを対象として彼らが主体的な学習者として何度もアクセスでき、考える資料としての価値は高く、今後ICTの活用を進めさらに発展させ、さらに利用しやすいものに高めていきたい。

○『「語り部」の思いをつなぐ語り部』となること

このつなぐ役割として最も重要なことは何であろうか。簡単ではないが、学生の役割はただ伝えるものではなく、語り部のみなさんと関わり、その思いを共有し、イタイイタイ病を知らない子どもたちにその思いを自分の言葉で伝える『「語り部」の思いをつなぐ語り部』となることである。



この学びを将来学校現場で教員として勤務することを目指す学生が、深く意識することで知識としてイタイイタイ病を学び伝えるレベルから、人として考え、市民としての正しい判断ができる子どもを育み、深い学びに変えることの意味を学んだ。

○『つなぐ』ことの本当の意味は『責任を持って続ける』こと

イタイタイ病連絡協議会の高木顧問のお話を聞きながら、またイタイタイ病資料館の柴田副館長との意見交換の中で、この取り組みは、単年度で終わるものでよいのであろうかという疑問がわいてきた。今回のフィールドワークで、1年間かけて学んだことは、イタイタイ病と向き合ってきた方々の信頼を得るまでの関わりや取り組みを継続することが必要であり、形式的な成果物を作るのみでは片付かない大きな問題であるということである。例えば、この学びをスタートとして継続的に研究を進める。ARにしてもモデルプランを発展させ、成果物を作るだけでなく、そこから大切なものを抽出し深め、学生が自分のものにする『責任を持って続ける』ことが重要である。

6. 課題解決策の自己評価

今回このフィールドワークに応募して、強く感じたことはイタイタイ病と闘ってきた方々の意識は非常に高く、簡単に理解し、共に伝えることや取り組むことは非常に難しいことである。このことは、例えば町興しなどの提案といった今の学生目線でフィールドワークを行い提案をするといった、今を生きる学生の視点で短い時間で考えるにはとても難しいテーマであるということである。イタイタイ病の語り部の高齢化とその伝承をどうするかをテーマに研究を進めてきたが、その闘いや苦悩の歴史は簡単に扱えるものではなく、さらにそこには当時の社会のあり様も問題としており、そこに今そしてこれからという視点を持ち込むには時間が短か過ぎた。その点で自己評価すれば、ほとんど達成できていないと言えることに気づかされる。イタイタイ病は、その歴史的な背景を含め、大学生が簡単に扱われる性質のものではないというのが実感である。

反面、高木顧問との数回の対話の中で、ようやく行きつくことができたのは、自身が語り部として、小学生に話されたときにその歴史や苦悩を子どもたちに伝える困難であった。そして、高木顧問から取材を重ねるうちに学生の質問内容が深まり、提案を話し合う中で、高木顧問と子どもたちをつなぐ役割であることに気付かされた。過程でイタイタイ病をこれからの時代に生きる子どもたちに伝えたいという思いと将来教員となって子どもたちと共にイタイタイ病資料館を訪れ、イタイタイ病の被害の大きさ、多くの被害者の方々の苦悩と闘いの歴史、そして「まだイタイタイ病は終わっていない。」という強い思いを子どもたちに伝えたいというベクトルが同じになった点であった。

この意味で、当初考え予定したことはほとんど実施することができなかった。大変残念なことであったが、逆にこのようなフィールドワークの難しさを学ぶとともに本当の意味で問題と関わることはこの困難を乗り越えた先にあることを学んだ気がする。

簡単に評価できるものではないが、大学生として簡単に触れられない問題があることを知り、同じベクトルを見出し、取り組む糸口を見出せたことは大きな成果であると考えている。

今回、制作したAR教材は、まだまだ未完成である。今後、新しいコンテンツを加え、内容を増やすことまたイタイタイ病資料館を訪れる小中学生に実際に活用してもらい意味あるものに修正する作業を続ける必要がある。最後に富山国際大学子ども育成学部としても教職課程の中で、このイタイタイ病に関する学びを位置づけ本当の意味での学びにつなげていただきたいと考えている。イタイタイ病連絡協議会の高木顧問からもぜひ次の時代に教員となる学生のみなさんに学んでほしい、そのために協力していきたいという励ましの言葉もいただいた。

大きな成果として伝えることはできないが、イタイタイ病の苦難の歴史を語り部のみなさんから直に学べたことで、これからのイタイタイ病の伝承について、深く考えることができたことは大きな成果であったと考える。